

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 京都府教育委員会

所 在 地 京都府京都市上京区下立売新町西入藪ノ内町

代 表 者 職 氏 名 教育長 小田垣 勉

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名

ふりがな	きょうとふりつそのべこうとうがっこう	ふりがな	ながい まさと
学校名	京都府立園部高等学校	校長名	永井 正人
ふりがな	なんたんしりつとのだちゅうがっこう	ふりがな	はたやま こういちろう
学校名	南丹市立殿田中学校	校長名	畑山 晃一郎
ふりがな	なんたんしりつごまごうしょうがっこう	ふりがな	おか ただよし
学校名	南丹市立胡麻郷小学校	校長名	阜 正是
ふりがな	なんたんしりつとのだしょうがっこう	ふりがな	ひらい しげる
学校名	南丹市立殿田小学校	校長名	平井 茂

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

児童生徒に求められる英語力と「豊かなコミュニケーション力」を有するグローバル人材の育成を目指した小・中・高等学校における一貫性のある指導・評価の研究開発

(2) 研究の概要

本事業を活用し、英語の基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成を図る。

12年間を通して、英語を使い、「自分のこと」「家族や友達のこと」「我が町・府のこと」「我が国のこと」に関して、自信を持って発信できる力を養うための英語教育に係る系統的なカリキュラムを開発する。

具体的には、

- ① 小学校においては学級担任を中心に、英語担当教員やALT等を活用しながら、指導体制を工夫する。低・中学年においては、外国語活動の導入によりコミュニケーション能力の素地を育

成する指導法を研究する。高学年においては、外国語科の導入により、「話すこと」「聞くこと」に加え「読むこと」「書くこと」の指導法と評価の研究を行う。

- ② 各校種において「CAN-DO 形式での学習到達目標」を設定し、ポートフォリオやパフォーマンス評価を評価の方法として確立し、英語力の向上の指針として生かしていく。
- ③ 自信を持って我が国、我が町の伝統や文化を紹介・発信していくための教材を開発し、児童生徒の日本人としてのアイデンティティを育成する。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

胡麻郷小学校は、平成21年度に「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」の指定を受け、平成23年度より小学校で必修化された小学校外国語活動において、教材の効果的な活用方法、評価の在り方、指導体制の在り方について研究実践を行ってきた。また、殿田中学校と殿田小学校と胡麻郷小学校においては、年間を通して中学校ブロックでの研究会を実施し、授業研究会をはじめとする小小連携、小中連携に取り組んでいる。一方、園部高等学校は、平成18年度から3年間、SELHiの指定を受け、学習形態をはじめとする指導方法の在り方や、「CAN-DO 形式での学習到達目標」の設定、ルーブリックの構築によるパフォーマンス評価方法の開発に取り組んできた。近年では、「京都国際科」と小学校との校種間連携事業として「外国語活動パートナーズクール」を実施し、高校生の指導のもと、小学生がこれまで学習してきた英語を生かして、積極的にコミュニケーションを図る力を養う機会となっている。

しかしながら、小学校外国語活動で学習を積み上げてきた児童が、中学校に進学した際に、活動型の英語と教科型の英語との違いに戸惑う場面が多いなど、小学校から中学校への円滑な接続という面において課題が見られる。

本研究の目的は、小・中・高等学校12年間を通して、グローバル化に対応した児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、新たな系統的なカリキュラムを開発することにある。そのための指導法はもちろんのこと、小・中・高等学校を通じて一貫した学習達成目標を設定し、評価方法をより具体的なものにしていきたい。

②研究仮説

小学校と中学校の各学年における「CAN-DO 形式での学習到達目標」を設定し、学習内容を定着させながら学習を積み上げることで、以下の項目について、向上を図ることができると考えられる。

- (1) 児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を向上させることができる。
- (2) 小学校高学年では、自分の伝えたいことを言葉で表現することができる。
- (3) 中学校では、英語を使い、我が国、我が町の伝統や文化を自信を持って紹介・発信できる。

また、小学校におけるポートフォリオ評価の活用や小・中・高等学校でパフォーマンス評価を効果的な評価方法として導入することで、児童生徒の英語力を向上させることができる。

③研究成果の評価方法

児童生徒の英語力がどれだけ育っているのか検証できるように、評価方法の見直し、活動記録分析や実態調査などを定期的に行う。教員の英語力についても、同様の分析や調査を行う。

小・中・高等学校12年間を通しての系統的なカリキュラムの開発が適切に進んでいるか、公

開授業研究会を開くことで、英語教育専門家や他校の教員から多様な意見を取り入れ、さらに質的な充実を目指す。

学習形態、指導形態、新たな教材・教具の活用を順次試行することで、取組以前と以後の様子を比較検討するために、第一年次、第二年次、第三年次にわたって分析を行う。

(4) 研究開発型

	開始学年及び年間あたり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第一年次 (H27)	第二年次 (H28)	第三年次 (H29)
胡麻郷小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第1・2学年 20コマ 第3学年 35コマ 第4学年 70コマ	第1・2学年 20コマ 第3学年 35コマ 第4学年 70コマ	第1・2学年 20コマ 第3学年 35コマ 第4学年 70コマ
胡麻郷小学校 教科型	第 学年 コマ	第5・6学年 105コマ	第5・6学年 105コマ	第5・6学年 105コマ

	開始学年及び年間あたり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第一年次 (H27)	第二年次 (H28)	第三年次 (H29)
殿田小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第1・2学年 20コマ 第3・4学年 35コマ 第5学年 70コマ 第6学年 35コマ	第1・2学年 20コマ 第3・4学年 35コマ	第1・2学年 20コマ 第3年 35コマ 第4学年 70コマ
殿田小学校 教科型	第 学年 コマ	第6学年 35コマ	第5・6学年 70コマ	第5・6学年 105コマ

(5) 研究計画

○第一年次～第三年次、校種別

【小学校】

第一年次

○小学校6年間及び中学校接続を見通した系統的なカリキュラムの開発を試行する。

- ・低・中学年における外国語活動、高学年における外国語科における新たなカリキュラムを開発し、その指導法を検討する。
- ・コミュニケーション能力の素地を育成するための効果的な教材・教具を開発する。
- ・外国語科における「読むこと」「書くこと」の指導法について検討する。
- ・中学校と合同で授業研究会を開催することで、小学校英語と中学校英語との教育内容の接続を図る。
- ・教員の英語指導力向上のため、市教育委員会による英語研修や校内研修、中学校との合同授業研修等を開催する。

○評価方法の開発

- ・英語を用いて何ができるようになるかについて、「CAN-DO形式での学習到達目標」の内容を

検討する。

- ・ポートフォリオ評価について検討・精査する。
- ・パフォーマンス評価による、コミュニケーションに対する「関心・意欲・態度」及び「話すこと」「聞くこと」における技能の評価方法を検討する。

○小中合同研究発表会を開催し、第一年次の研究成果の報告を行う。

第二年次

○第一年次の計画を見直し、修正や変更、拡充を行い本格化させる。

- ・カリキュラムの見直しを行う。
- ・評価内容、方法の加筆修正を行う。
- ・校内研修等を継続する。

○小中合同研究発表会を開催し、第二年次の研究成果の報告を行う。

第三年次

○第二年次の計画を精査し、より進展させた授業内容や評価の研究の推進と評価に向けた作業を行う。

- ・カリキュラムの最終案をまとめ、実践することで、南丹市小学校英語教育カリキュラムプランを策定する。
- ・評価方法の更新を行う。
- ・校内研修等を継続する。

○小中合同研究発表会を開催し、研究成果の発表と評価、実践事例の紹介等を行う。

- ・ホームページ等で実践の様子や研究成果を公開する。
- ・指導案集等、研究成果を研究冊子にまとめる。

【中学校】

第一年次

○小中接続、中高接続を見通した英語教育カリキュラムの開発を試行する。

- ・小学校高学年の外国語科を踏まえた系統的なカリキュラムを作成する。
- ・中学校から高等学校への接続を見据えた4技能統合の学習指導方法を検討する。
- ・小学校との合同研修を開催して、小学校の研究に助言を行うとともに、小学校教員の指導力向上を図る。

○評価方法の開発

- ・「CAN-DO 形式での学習到達目標」の設定を行う。
- ・ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を開発する。

○小中合同研究発表会を開催し、第一年次の研究成果の報告を行う。

第二年次

○第一年次の計画を見直し、修正や変更、拡充を行い本格化させる。

- ・カリキュラムの見直しを行う。
- ・評価内容、方法の加筆修正を行う。
- ・校内研修等を継続する。

○小中合同研究発表会を開催し、第二年次の研究成果の報告を行う。

第三年次

○第二年次の計画を精査し、より進展させた研究の推進と評価に向けた作業を行う。

- ・カリキュラムの最終案をまとめ、実践することで、南丹市中学校英語教育カリキュラムプランを策定する。
- ・評価方法の更新を行う。
- ・校内研修等を継続する。

○小中合同研究発表会を開催し、研究成果の発表と評価、実践事例の公表等を行う。

- ・ホームページ等で実践の様子や研究成果を公開する。
- ・指導案集等、研究成果を研究冊子にまとめる。

【高等学校】

第一年次

○小・中・高等学校の接続を見通した英語教育カリキュラムの開発を試行する。

- ・小学校及び中学校における英語教育の現状を踏まえ、より効果的で系統的なカリキュラムを作成する。

○評価方法及び目標設定の共有と開発

- ・園部高校で用いている「CAN-DO 形式での学習到達目標」を、小学校及び中学校と共有し、1 2年間を通して一貫した「学習達成目標」の設定を、小・中・高等学校で連携して行う。
- ・本校で培ってきたルーブリックを用いたパフォーマンス評価の手法を、小学校及び中学校と共有し、より効果的なパフォーマンス課題やその評価方法を開発する。

第二年次

○児童や生徒の現状分析を行い、第一年次の計画を見直し、修正や変更、拡充を行う。

- ・カリキュラム上の内容を改善する。
- ・評価内容・方法及び学習達成目標の加筆修正を行う。

第三年次

○児童や生徒の現状分析を行い、第二年次の計画を精査し、より進展させた研究の推進と評価に向けた作業を行う。

- ・カリキュラムの最終案をまとめ、実践する。
- ・評価方法及び学習達成目標の改善を行う。

平成27年度の進捗状況・課題

□指導に関すること（指導目標・内容、指導方法、教材等）

【小学校】

○全学年で単元のゴールを設定し、児童の学習意欲を向上させるため、授業で「必然性のある活動」や「相手意識、目的意識のある活動」を多く設定した。例えば、京都市内の観光地等で直接外国人観光客へインタビューしたり、市国際交流協会の協力を得て、地元の外国人と交流したりと、実際に英語で話す直接体験を通して、英語を使う楽しさを味わい、臆せず英語を使う自信を培うことができた。

○外国語科・外国語活動の基本的な1時間の学習の流れを作成し、視覚的にとらえられるようカードで表示することで、児童に見通しを持たせるとともに、全校で授業プロセスを統一することができた。

○全学年の外国語科・外国語活動のカリキュラム（年間指導計画）を作成し、年間の見通しを持つことができた。

- 高学年における毎時間の指導過程の中に「Share time」（展開における活動内に設定）を設けることで、児童の率直な疑問や気付きを発言させ、進捗状況を共有したり、課題を解決する具体的な方法を共有したりした。その結果、全ての最終のゴール（本時の目当て）を学習時間内に達成できるようになった。
- 「読むこと」「書くこと」に対する抵抗感を減らすために、視覚的に理解しやすい文部科学省配布の補助教材（Hi, friends! Plus）を活用した。
- 高学年では、「読むこと」「書くこと」の指導の工夫としてペンマンシップ等アルファベット学習教材の積極的な活用、文字が入ったワークシートやピクチャーカードの活用、使用表現の板書など、文字や文構造の規則性に気付かせるために、文字に触れる機会を多く設定した。
- 全学年で絵本の読み聞かせを導入し、学習への動機付けを高め、内容を推測しながら理解する力の向上、また、高学年においては文字と音、文構造への気付きを促した。
- 胡麻郷小学校低学年では「英語の歌」の指導に、TPR（全身反応教授法）を取り入れ、英語独特のリズムや音声に自然に慣れ親しませるようにした。
- 効果的な指導のための教材選定や教材開発を行う。
- 外国語科と他教科との関連を明らかにさせる。
- 研究実践の成果を市内全小学校に普及させ、新学習指導要領完全実施の際、スムーズに取り組めるよう準備を進める。

【中学校】

- 英語によるコミュニケーション能力の向上のため、教員が発話をおおむね英語で行ったり、英語でやり取りする活動を取り入れたりした。
- 小学校で培った英語によるコミュニケーション能力を基盤に、英語でのやり取りに対処する力をつけるため、外国人に英語で発表し「質疑応答」するプロジェクト学習プランを作成した。
- 小学校との接続を滑らかにするため、中学校第1学年では視覚的な教材やチャンツ、フォニックス指導等を他学年より多く取り入れた。
- 小学校から中学校への接続を滑らかにするための学習内容を開発する。
- 「CAN-DO 形式での学習到達目標」を小中接続、中高接続を見通した内容にさらに改善する。
- 研究実践の成果を市内全中学校に普及させ、新学習指導要領完全実施の際、スムーズに取り組めるよう準備を進める。

【高等学校】

- 入学してくる生徒の英語学習におけるつまづきを克服するための教材を、その実情に合わせて改訂して取り組むことで、高校での学びを始める生徒の意欲を高めることができている。
- 高等学校で設定している「CAN-DO 形式での学習到達目標」や本校へ入学してくる生徒の英語力に関する情報（優れていることや課題など）を積極的に中学校へ提供して共有を図る。

□研究に関すること（指導体制、職員研修等）

【小学校】

- 全指導時間において、授業をメインで進行する学級担任を T1、英語話者のモデルとしての英語専科加配、ALT（外国人及び日本人）や中学校英語担当教員を T2 とした授業体制を整えた。
- 市教育委員会による英語研修や、中学校教諭・ALT との TT 指導を通し、教員の英語力及び指導力が向上した。また、授業におけるクラスルーム・イングリッシュを充実させ、指導者が自ら臆せず英語を使おうとする姿勢が確立された。

- 中学校英語担当教員が小学校第6学年の授業においてTT指導を行うことで、教科化に向けての指導内容や中1スタートプログラムを小中学校教員が共同で検討し、滑らかな小中接続ができるようにした。
- 週の初めに殿田小学校英語加配教員が胡麻郷小学校に勤務し、研究成果を自校へ持ち帰り、週の後半に実践した。その様子や結果を翌週初めに胡麻郷小学校で交流することで、互いに授業改善を図り、質の高い授業の創造に努めた。
- 胡麻郷小学校において、外国語科・外国語活動実践研究中間報告会を開催し、第1・第4学年の外国語活動及び第5・第6学年外国語科の授業を公開するとともに、研究報告会を実施し、参観者等から広く意見や評価を受け、研究を深めた。
- 指導者の指導力及び英語力のさらなる向上のため、英語研修や校内研修を充実させる。
- 中学校との合同授業研究会を随時開催し、小学校英語と中学校英語との教育内容のより滑らかな接続について研究を深める。
- 小学校教員による中学校第1学年授業参観の機会を設定することにより、意識を喚起し、指導意欲の向上を促す。

【中学校】

- 中学校英語担当教員が小学校第6学年の授業においてTT指導を行うことで、小学校の指導内容・指導方法を理解し、中学校での指導内容・指導方法の工夫・改善につなげることができた。
- 英語の学習を経験してきた中学校第1学年に対し、英語教育の目標・内容の高度化という観点で公開授業を行うとともに、中学校全体で研究に取り組み、その成果と課題を二年次の中間報告会として発表し、参観者から広く意見や評価を受ける必要がある。
- 外国人ALT配置のさらなる充実を図り、生徒のコミュニケーション能力育成につなげる。
- 英語によるコミュニケーション能力の向上のため、小学校における研究の成果である以下の3点を継承していく。
 - (1) 「音声」からの学習を大切にする。
 - 「聞くこと」「話すこと」から導入し、「読むこと」「書くこと」へつなげる道筋を大切にす。
 - (2) 「Share time」の継承
 - 言語活動の途中で評価、振り返りの時間を取り、成果・課題を明らかにして活動の質を高める。
 - (3) 誰でもペアの継承
 - 誰とでも言語活動ができることを意図的に続け、授業における生徒の発話量を増やす。

【高等学校】

- 本校のパフォーマンス課題やその評価方法(ルーブリック)や「CAN-DO形式での学習到達目標」を定期的に改善し、それらを効果的に年間指導計画の中に配置することができている。
- 外部試験を実施し、その結果を英語担当教員で経年比較したり分析したりすることで、生徒の実情を把握し、日頃の授業に生かすことができている。
- 上記の内容をより積極的に中・高等学校の教員間で共有できる体制づくりを積極的に進める。

□児童生徒の英語教育に係る意識調査に関すること

【小学校】

「外国語活動で学んでいる『英語』についてどう思いますか」の設問に対して、「とても好き

である」「好きである」と回答した第5・第6学年の割合は以下のとおりである。

	第5学年	第6学年
とても好きである	31%	17%
好きである	61%	69%
あまり好きではない	0%	11%
好きではない	8%	3%

上記の結果から、英語学習に対して肯定的にとらえている児童の割合は比較的高いが、「とても好きである」と回答している児童の割合が非常に低い。また、学年が上がることで、「とても好きである」と答えた児童の割合が低下していることがわかる。意識調査を年次ごとに実施し、経年の変化を把握するとともに、その要因を分析・考察することで授業改善や研究実践の深化を図り、第6学年の「とても好きである」の回答の割合50%を目指すとともに、学年が進んでも意欲が低下しない指導内容や方法について研究する必要がある。

【中学校】

「授業で学んでいる『英語』についてどう思いますか」の設問に対して、「あまり好きではない」「好きではない」と回答した生徒の割合は以下のとおりである。

	第1学年	第2学年	第3学年
とても好きである	16%	12%	5%
好きである	47%	54%	45%
あまり好きではない	28%	31%	47%
好きではない	9%	3%	3%

上記の結果から、英語学習に対して肯定的にとらえている生徒の割合が小学校と比べると高くない（英語嫌いの割合が高い）ことがわかる。意識調査を年次ごとに実施し、経年の変化を把握するとともに、その要因を分析・考察することで授業改善や研究実践の深化を図り、第3学年の「あまり好きではない」「好きではない」つまり『英語嫌い』の割合30%以下を目指すとともに、学年が進んでも意欲が低下しない指導内容や方法について研究する必要がある。

(6) 評価計画

○第一年次～第三年次、校種別

【小学校】

第一年次

- 設定した達成目標及び「CAN-DO形式での学習到達目標」について、運営指導委員会指導のもとに、その妥当性について殿田中学校ブロック英語教育内容検討部会で検討する。
- 実態調査(自己評価アンケート・振り返りシート等)を基に、仮説の検証を行う。
- 各学年における学習場面での評価、児童の成長過程での評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第一年次の研究成果を公表し評価を得る。

第二年次

- 実態調査(自己評価アンケート・振り返りシート等)を行い、第一年次の研究成果を評価する。
- 各学年における学習場面での評価、児童の成長の過程での評価を行う。

- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得る。

第三年次

- 実態調査(自己評価アンケート・振り返りシート等)を行い、第二年次までの研究成果を評価する。
- 各学年における学習場面での評価、児童の成長の過程での評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、3年間の研究成果を公表し評価を得る。
- 3年間の総括評価を行う。

【中学校】

第一年次

- 設定した達成目標及び「CAN-DO 形式での学習到達目標」について、運営指導委員会の指導のもとに、その妥当性について殿田中学校ブロック研究会で検討する。
- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を基に、仮説の検討を行う。
- 各学年における学習場面(教員及び生徒自身による)での評価、生徒の成長の過程での評価を行う。
- 実践事例の分析、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第一年次の研究成果を公表し評価を得る。

第二年次

- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を行い、第一年次の研究成果を評価する。
- 各学年における学習場面(教員及び生徒自身による)での評価、生徒の成長の過程の評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得る。

第三年次

- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を行い、第二年次までの研究成果を評価する。
- 各学年における学習場面(教員及び生徒自身による)での評価、生徒の成長の過程で評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、3年間の研究成果を公表し評価を得る。
- 3年間の総括評価を行う。

【高等学校】

第一年次

- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を基に、仮説の検証を行う。
- 各学年における学習場面での評価、生徒の成長の過程での評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第一年次の研究成果を公表し評価を得る。

第二年次

- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を行い、第一年次の研究成果を評価する。

- 各学年における学習場面での評価(教員及び生徒自身による)を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得る。

第三年次

- 実態調査(自己評価アンケート・4技能を客観的に測る評価等)を行い、第二年次までの研究成果を評価する。
- 各学年における学習場面での評価、生徒の成長の過程での評価を行う。
- 実践事例の分析、検討、評価を行う。
- 研究発表会を開催し、3年間の研究成果を公表し評価を得る。
- 3年間の総括評価を行う。

平成27年度の進捗状況・課題

□評価・評価計画に関すること

【小学校】

- 全学年の外国語科・外国語活動の学習カリキュラム(評価計画)を作成し、「英語を用いて何ができるようになるか」という観点を大切に、「CAN-DO形式での学習到達目標」を設定した。
- 児童の自己効力感を高めるため、「できた」「できなかった」ではなく、「できるようになる」過程を大切に、「できた感」「わかった感」を積み重ね、次時の学習意欲を引き出す内省シート(自己評価シート)を開発した。
- 高学年においては、プレゼンテーション、スピーチ、ALTとのやり取り等から4観点で文章記述による評価をした。
- 胡麻郷小学校の高学年において、試行的に評価基準(ルーブリック)を設定し、指導者よっての評価のずれがないようにするとともに、児童と共有することで、明確な目標が持てるようにし、学習意欲の向上につなげた。
- 作成した学習カリキュラム(評価計画)及び「CAN-DO形式での学習到達目標」を小・中接続した系統性のある内容に改善していく。また、小学校高学年の外国語科における評価の在り方、評価方法、評価基準(CAN-DO形式含む)をさらに検討し、精度を高め、児童と共有しやすいものにする。
- それぞれの発達段階に応じた低・中学年の評価の在り方について検討する。
- パフォーマンス評価やCAN-DO評価の在り方の研修を実施し、指導と評価の一体化を図る。

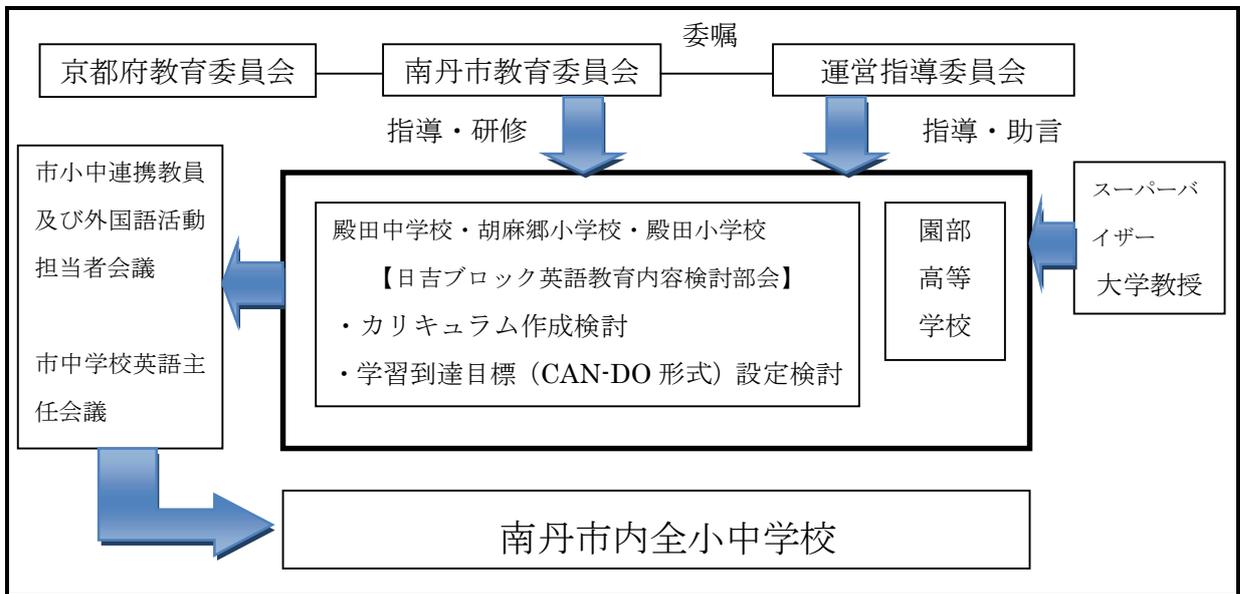
【中学校】

- 「CAN-DO形式での学習到達目標」を設定した。また、「CAN-DO形式での学習到達目標」を基に、パフォーマンス課題を行うことで、「英語を使って何ができるか」を生徒が意識し始め、目標がより具体化されることで生徒の学習意欲の向上につながっている。
- 英語教育強化地域拠点事業における「研究校」を対象とした外部試験の特別価格での割引制度を活用し、実用英語技能検定取得に向けて、一次筆記試験・面接対策講座を行うなど支援をしながら年3回英語検定の実施を促した。全生徒の半数近くが受験し、英語の得意な生徒のみならず、苦手な生徒も英語検定に挑戦する姿が見られた。
- 「CAN-DO形式での学習到達目標」を小・中・高等学校を接続した系統性のある内容に改善するとともに、パフォーマンステストの試行を重ね、資料を蓄積する。

- 小学校から中学校への滑らかな接続を図り、次年度の新入生に8時間程度のプロジェクト学習を実施するに当たり、取り扱う言語材料及び文法内容を確認するとともに、その評価方法・計画についても検討する。
- 【高等学校】**
- 各学年・各コースにおいて様々なパフォーマンス課題を実施し、その活動をルーブリックを用いて効果的に評価できており、それが生徒の積極的に英語で自分のことを表現しようとする意欲につながっている。
 - 本校がここまで培ってきたルーブリック構築の手法や、パフォーマンス評価の方法を小・中・高等学校で連携しながら共有できるようにする。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

- 系統的カリキュラムの立案、実施に関わる指導・助言
 - 評価内容、評価方法に対する指導・助言
 - 授業研究による指導・助言
 - 小小連携、小中連携、中高連携等合同研究会における外部講師としての指導・助言
 - 研究発表会支援
- 平成27年度の進捗状況・課題**
- 【1】第1回運営指導委員会**
- 日時 平成27年7月6日(月)
- 場所 南丹市立殿田小学校
- 内容 ア 殿田小学校第6学年「外国語活動」公開授業参観
イ 運営指導委員会

- ・委嘱状交付
- ・事業説明
- ・協議及び指導・助言
- ・事業計画説明
- ・各校の取組について
- ・公開授業について

【2】第2回運営指導委員会

日時 平成27年11月11日（水）

場所 南丹市立胡麻郷小学校

内容 平成27年度文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」指定教育課程特例校英語外国語活動実践研究中間報告会

- ・小学校第1・第4学年の外国語活動及び第5・第6学年英語の公開授業参観
- ・研究中間報告会の参加及び指導・助言

【3】第3回運営指導委員会（予定）

日時 平成28年2月4日（木）

場所 南丹市立殿田中学校

内容 ア 殿田中学校授業参観

イ 運営指導委員会

- ・今年度総括（中間報告会を終えての課題等）
- ・平成28年度研究の方向性・事業計画

○第1回運営指導委員会において、「事業計画を他ブロックへ広めること」「4技能を総合的に育成する授業改善を進めること」「児童・生徒への英語に対する意識調査アンケートの実施について」等、研究の方向性に係る貴重な指導・助言を得ることができた。

○運営指導委員会の開催と合わせて、各指定校において公開授業を行い、授業実践についての意見や評価を得た。

●今年度は計画的に運営指導委員会を実施し、その都度の指導・助言で学びを重ねることができた。小高連携の取組報告は行うことができたが、小・中・高等学校、3校種の連携は今後の課題であることから、12年間の系統性のあるカリキュラムの立案、実施や評価内容、評価方法等の検討をさらに進め、その研究の内容について意見や評価を得る必要がある。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・南丹市年間事業計画（案）の作成 ・事業推進体制の整備 ・第1回南丹市小中連携担当教員及び外国語活動担当者会議 ・平成27年度「『小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業』に関する説明会」 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	

5月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・小学校外国語活動及び外国語科の年間指導・評価計画（仮）の作成 ・小学校「CAN-DO形式での学習到達目標」（仮）の設定 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・教育内容及び方法に関する先進校視察（岐阜市立長良西小・長良中） ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 ・市教育委員会による小学校教員対象の英語スキルアップ研修 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・運営指導委員会の指導・助言に基づく実践の振り返り ・小高連携外国語活動パートナーズスクール事業の実施計画の作成 ・市教育委員会による小学校教員対象の英語スキルアップ研修 ・中学校「CAN-DO形式での学習到達目標」（案）の設定 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	第1回運営指導委員会実施
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の見直しと2学期以降の計画立案 ・南丹市夏季合同研修会（関西大学教授による英語教育改革に係る講演：南丹市全小中学校教員対象） ・小学校外国語活動及び外国語科の年間指導・評価計画（案）の作成 ・第2回南丹市小中連携担当教員及び外国語活動担当者会議 ・第1回南丹市中学校英語主任会議 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 ・市教育委員会による小学校教員対象の英語スキルアップ研修 	夏季研修会における指導・助言
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・南丹市児童生徒の英語教育に係る意識調査の作成 ・第2回南丹市中学校英語主任会議 ・小学校外国語活動及び外国語科の年間指導・評価計画（案）の加筆・修正 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・南丹市児童生徒の英語教育に係る意識調査の実施 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・平成27年度文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」指定教育課程特例校英語外国語活動実践研究中間報告会の実施（胡麻郷小学校） ・南丹市国際交流協会との交流（胡麻郷小学校） ・第1回小高連携外国語活動パートナーズスクール事業の実施（京都府立園部高等学校との交流） ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	第2回運営指導委員会実施

12月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・研究中間報告会を踏まえた課題分析 ・小学校外国語活動及び外国語科の年間指導・評価計画(案)の加筆・修正 ・小中学校「CAN-DO形式での学習到達目標」(案)の加筆修正 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・研究発表会を踏まえた課題分析 ・日吉ブロック合同研修会(立命館大学教授による小中接続英語教育について) ・平成27年度「英語教育強化地域拠点事業」「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」全国連絡協議会 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・本年度の研究の成果や課題の検証と改善点の明確化 ・第2回小高連携外国語活動パートナーズスクール事業の実施(京都府立園部高等学校との交流) ・先進校視察(京都教育大付属桃山小中高等学校) ・第3回南丹市小中連携担当教員及び外国語活動担当者会議 ・第3回南丹市中学校英語主任会議 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	第3回運営指導委員会実施
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の研究 ・評価方法の精査(加筆修正) ・次年度に向けての検討・準備作業 ・日吉ブロック英語教育推進内容検討部会 	
【その他の取組】		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 京都府教育委員会

所 在 地 京都府京都市上京区下立売新町西入藪ノ内町

代 表 者 職 氏 名 教育長 小田垣 勉

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名

ふりがな	きょうとふりつひがしうじこうとうがっこう	ふりがな	なか ともあき
学校名	京都府立東宇治高等学校	校長名	中 友明
ふりがな	うじしりつおうぼくちゅうがっこう	ふりがな	いしだ みつはる
学校名	宇治市立黄檗中学校	校長名	石田 光春
ふりがな	うじしりつうじしょうがっこう	ふりがな	いしだ みつはる
学校名	宇治市立宇治小学校	校長名	石田 光春

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

- ・ 公立学校の実態に即したカリキュラム (Uji-Obaku メソッド) の開発
- ・ CAN-DO リスト形式での学習到達目標等を活用し技能別に行う評価方法の開発
- ・ 小学校で身につけたコミュニケーション能力の中・高等学校への効果的な接続

(2) 研究の概要

公立学校の実態に即したカリキュラム (Uji-Obaku メソッド) を開発し、小学校から中・高等学校への接続を見通したカリキュラムに基づく一貫した英語教育を実現し、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力を高める。

- ・ プロソディ (英語特有の発音、リズム、イントネーションなど) を低年齢の間に習得させること、発音と綴りの関係に気付かせ文字を自然に習得させることに重点化したカリキュラムを開発し、指導の研究を行う。
- ・ 小学校専科教員、中・高等学校英語担当教員を中心に、学級担任とともに児童生徒の実態に合った CAN-DO リスト形式の学習到達目標を設定し、指導方法改善のための研究を進める。また、設定した学習到達目標を活用し、4技能を評価する方法の研究を行う。

・小学校で身体を通して身につけたコミュニケーション能力が、中・高等学校で行う実践的な英語の授業への接続に効果的であることを実証し、小・中・高等学校を通して身につけた力を糧に、我が国の伝統や文化のすばらしさを、英語を用いて自ら発信できる力を育成する。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

宇治小学校・黄檗中学校は、平成 24 年度に開校した施設一体型の小中一貫校であるが、通学するのは校区内の児童生徒のみという一般的な公立学校である。小・中学校教員は、同じ職員室の中で第 1 学年から第 9 学年の児童生徒を見守ることができ、互いに実態交流し、指導できるという利点がある。

外国語活動、英語においても、この利点を生かし、より児童生徒の実態に即した系統立てた指導計画を作成し、教材の効果的な活用方法等の研究実践を行っている。また宇治小学校では大学とも連携した専科教員による指導を通し、公立小学校としては高度な英語教育（シラブル、アクセント、フォニックスの指導等）を展開している。

児童生徒には、学校生活のさまざまな場面において自分の思いや考えを伝えることに躊躇する実態がある。児童生徒は、それぞれいろいろな思いを持っているのだが、それを「言葉」で表現することには大きな課題が見られる。そのため「言葉」で伝え合うことの大切さを児童生徒だけでなく、教員も互いに意識した「言葉の学び」の研究も進めている。

つまり「言葉」そのものを学ぶ教科（国語・英語）を土台とし、「言葉」による伝え合いの充実を図る中で、全教科の授業の中で「言葉」で伝え合うことの大切さを意識した取組を始めている。

黄檗中学校を卒業した生徒の大多数は、東宇治高等学校をはじめとする地元の公立高等学校へ進学している。東宇治高等学校は、平成 24 年度に「英語力を強化する指導改善の取組」（文部科学省・京都府教育委員会の指定）、平成 25 年度に「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」（文部科学省・京都府教育委員会の指定）の研究を進め、「知識・技能を活用する活動を通じて 4 技能をバランスよく育成するための指導及び評価方法を開発し、CAN-DO リスト形式での学習到達目標の効果的な活用を行う」ことを研究テーマに第 1・第 2 学年で授業改善の取組を進めてきた。平成 26 年度にはこれら活用し、全学年で授業改善の取組を行った。

本事業においては、公立学校の実態に即した小・中・高等学校の接続を意識したカリキュラム（Uji-Obaku メソッド）の開発とそれに対応する評価方法の研究を行いたい。またグローバル化に対応した英語力と自分の言葉で自分の思いや考えを自ら発信できるコミュニケーション能力を育成していきたい。

②研究仮説

研究仮説 1

プロソディを低年齢の間に習得させることに重点化した指導、へボン式ローマ字、フォニックス、発音記号等を取り入れた小中一貫した指導が、児童生徒の自然な文字の習得につながる。

研究仮説 2

児童生徒の実態に合った CAN-DO リスト形式での学習到達目標を設定し、4 技能を評価するこ

とにより、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力が向上する。

研究仮説3

小学校で身体を通して身につけたコミュニケーション能力の素地及び基礎が、中・高等学校で行うコミュニケーション能力を育成する授業につながる。

③ 研究成果の評価方法

【小学校】

- ・授業観察、ポートフォリオ、インタビュー、質問紙等による質的調査
- ・プロソディや会話力を測定するテスト等による量的調査

【中学校】

- ・授業観察、ポートフォリオ、インタビュー、質問紙等による質的調査
- ・外部検定試験（英検）、プロソディや会話力を測定するテスト等による量的調査

【高等学校】

- ・筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により4技能の評価（CAN-DO リストでの学習到達目標を基にルーブリックを作成）
- ・外部検定試験（GTEC 等）

（4）研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次（H26）	第一年次（H27）	第二年次（H28）	第三年次（H29）
① 宇治小学校 外国語活動型		第1・2学年 0.5コマ 第3・4学年 1コマ 第5学年 2コマ	第1・2学年 0.5コマ 第3・4学年 1コマ	第1・2学年 0.5コマ 第3学年 1コマ 第4学年 2コマ
② 宇治小学校 教科型		第6学年 2コマ	第5学年 2コマ 第6学年 3コマ	第5・6学年 3コマ

（5）研究計画

○第一年次～第三年次、校種別

第一年次

【小学校】

- ・第1～第4学年は、担任とALTによる「活動型」の授業を実施
- ・第3・第4学年は「Hi, friends!1」を使用し、国語科と連携したヘボン式ローマ字指導を実施
- ・第5学年は、専科教員、担任とALTによる「活動型」の授業を実施、週2コマのうち1コマはモジュール授業を実施、教材は「Hi, friends! 1」「Hi, friends! Plus」を使用
- ・第6学年は、専科教員、担任とALTによる「教科型」の授業を実施、うち1コマはモジュール授業を実施、教材は「Hi, friends! 2」「Hi, friends! Plus」を使用
- ・低年齢期のプロソディ習得をめざす研究
- ・「活動型」、「教科型」授業の教材開発
- ・カリキュラム（Uji-Obakuメソッド）の開発

- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標の作成
- ・評価方法の研究
- ・モジュール授業の研究と教材開発

【中学校】

- ・英語で行う授業のための研究
- ・小学校との接続を意識した言語活動の充実
- ・小学校の音声指導と連携した発音記号指導の研究
- ・カリキュラム（Uji-Obaku メソッド）の開発
- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標の作成
- ・評価方法の研究

【高等学校】

- ・英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善
- ・中学校との接続を意識した言語活動の充実
- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標の改善
- ・評価方法の研究

第二年次

【小学校】

- ・第1～第4学年は、担任とALTによる「活動型」の授業を実施
- ・第5学年は、専科教員、担任とALTによる「教科型」の授業を実施、週2コマのうち1コマはモジュール授業を実施
- ・第6学年は、専科教員、担任とALTによる「教科型」の授業を実施、週3コマのうち1コマはモジュール授業を実施
- ・「活動型」、「教科型」ともに独自教材を使用
- ・第一年次に開発した教材、タスク、カリキュラムの全教員による共有
- ・授業の中で検証する実践的研究の実施
- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標を踏まえたカリキュラムの改善

【中学校】

- ・英語で行う授業の実施
- ・小学校との接続を意識した言語活動の充実
- ・第一年次に開発した教材、タスク、カリキュラムの共有
- ・授業の中で検証する実践的研究の実施
- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標を踏まえたカリキュラムの改善

【高等学校】

- ・英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善
- ・中学校との接続を意識した言語活動、4技能の総合的な育成を図る高度な言語活動の充実
- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標の改善
- ・評価方法の研究

第三年次

【小学校】

- ・第1～第4学年は、担任とALTによる「活動型」の授業を実施

- ・第4学年は、週2コマのうち1コマはモジュール授業を実施
- ・第5・第6学年は、専科教員と担任、ALTによる「教科型」の授業を実施、週3コマのうち1コマはモジュール授業を実施
- ・「活動型」、「教科型」ともに独自教材を使用
- ・開発・改善した教材、タスク、カリキュラムの全教員による共有
- ・授業の中で検証する実践的研究を実施
- ・CAN-DOリスト形式での学習到達目標を踏まえたカリキュラムの改善

【中学校】

- ・英語で行う授業の充実
- ・小学校との接続を意識した言語活動の充実
- ・開発・改善した教材、タスク、カリキュラムの全教員による共有
- ・授業の中で検証する実践的研究の実施
- ・CAN-DOリスト形式での学習到達目標を踏まえたカリキュラムの改善

【高等学校】

- ・英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善
- ・4技能の総合的な育成を図る高度な言語活動の充実
- ・中学校との接続を意識した言語活動の研究と実践
- ・CAN-DOリストでの学習到達目標の改善
- ・評価方法の研究

○平成27年度の進捗状況・課題

<成果>

①文字の自然な習得を図るための指導法について

【小・中学校】

- 発音と綴りの関係について、連携して系統立った指導を実施した。
 - ・プロソディを低年齢の間に習得させることに重点化した指導
 - ・フォニックス、発音記号等を取り入れた小中一貫の指導
 - ・国語科のローマ字学習において、ローマ字と英語の違いを明確にするため、自習用教材（ヘボン式ペンマンシップ）を大学と連携して開発
 - ・ヘボン式ペンマンシップの補助教材としての絵本も作成中
- 「言葉」そのものを学ぶ教科（国語・英語）を土台として、「言葉」で伝え合うことの大切さを意識した「言葉の学び」について研修し、「言葉」を意識した授業を実施した。

【高等学校】

- ・小・中学校で行った音声を意識した指導（綴り字から発音を予測させるなど）を継続して実施した。

②学習到達目標達成のための指導法と評価方法について

【小学校】

- ・小学校教員全員を対象に、中央研修の内容を基に外国語活動・英語を学ぶ効果や小学校教員のよさを生かした授業について、定期的に研修を実施した。その成果もあり、ALTと授業を楽しみながら進めていけるようになった。

- ・「Hi, friends! Plus」を活用し、「読む」「書く」の指導を試行した。成果として、第6学年の段階で確実に大文字は書くことができるようになった。
- ・第1～6学年まで、国語と外国語の関連性を意識した CAN-DO リスト形式での学習到達目標を設定することができた。
- ・第6学年において、自主教材によるモジュール学習の取組を始めることができた。

【中学校】

- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標を設定し、指導と評価の一体化の研究を進めることができた。
- ・大学教員を招き、英語の音声指導の工夫改善の視点や英語による授業の実施について研修を実施した。
- ・第2回英語検定を準会場として実施した。
- ・外部試験の結果を活用することによって、生徒の質的評価分析を行い、指導と評価の一体化を図った。

【高等学校】

- ・CAN-DO リスト形式による学習到達目標を達成させるため、英語の授業は英語で行うことを基本とし、生徒の英語使用の機会を多く設定できた。その結果、英語でのインタラクションの力がついてきた。

③コミュニケーション能力強化のための効果的な接続について

【小学校】

- ・第1～第4学年においては、学級担任のよさを生かし、ALT の支援のもと、児童が心と体を動かすことによって自分から進んで英語で伝える喜びを感じる授業づくりのため、取り組みを始めることができた。

【中学校】

- ・施設一体型小中一貫校の利点を生かし、第5～7学年を同じ英語教員・ALT が指導することができた。

【高等学校】

- ・①フォニックスを利用した音声指導、②基本名詞・基本動詞を中心とした語彙指導、③中学の既習事項の復習から始める英文法指導、④授業で使用する平易な英語表現を利用した言語活動と評価、⑤相槌や繰り返し、質問や短いコメント等を効果的に使用して英語で話し続けるペア活動と評価を行った。

<課題>

①文字の自然な習得を図るための指導法について

- ・小・中・高等学校における発音と綴りの関係についての系統立った指導の成果の検証
- ・「言葉の学び」における授業づくりとその後の児童生徒の実態の検証
- ・学級担任が自ら進んでコミュニケーション活動を意識した授業を展開するための研修の充実

②学習到達目標達成のための指導法と評価方法について

【小学校】

- ・モジュール学習の時間設定、内容の検討と検証
- ・児童の実態を踏まえた指導内容・方法の検討と検証
- ・国語と外国語との関連性を意識した CAN-DO リスト形式での学習到達目標を活用した授業改善

- ・児童の英語力に関する変容をつかむ手立ての一つとしての外部試験の計画的実施
- ・教科としての英語における評価計画の具体化
- ・全学年の外国語活動・英語カリキュラムの検証

【中学校】

- ・CAN-DO リスト形式での学習到達目標を踏まえたカリキュラムの改善
- ・生徒の質的評価分析を活用した指導と評価の検証

【高等学校】

- ・英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組を継続しているが、一層の指導と評価方法の研究を行う必要がある。特に、CAN-DO リスト形式での学習到達目標と指導方法の関連についての検討
- ・評価方法について、特に特定課題のルーブリック（短期的ルーブリック）の作成と改訂

③コミュニケーション能力強化のための効果的な接続について

【小学校】

- ・より効果的なコミュニケーション能力を身につけるための指導方法の検討と検証
- ・クラスルームイングリッシュをはじめ、日常生活の中で英語に慣れ親しむ場の設定

【中学校】

- ・より効果的なコミュニケーション能力を身につけるための指導方法の検討と検証

【高等学校】

- ・中学校における目標・内容の高度化に伴い、本校の CAN-DO リスト形式での学習到達目標を変えるべきか、今後連携を取っていきたい。

④研究全体について

- ・それぞれの校種において、大学教員と連携して授業交流や事後研修を行ったが、情報交流に終始したため、一貫したカリキュラム作成については検討が不十分である。今年度設定した CAN-DO リスト形式での学習到達目標等を生かしながら、カリキュラムを改善していく必要がある。
- ・外部試験の効果的な活用と検証
- ・研究発表会の開催

(6) 評価計画

第一年次

【小学校】

- ・プロソディの習得をプロソディテスト（シラブルテスト、アクセントテスト）により評価
- ・フォニックスに基づく発音と綴りの関係習得をヘボン式ローマ字テストにより評価
- ・「言葉の学び」への意識を質問紙調査

【中学校】

- ・プロソディ、発音と綴りの関係の習得を発音テストにより評価
- ・コミュニケーション能力をオーラルテスト、定期試験により評価
- ・「言葉の学び」への意識を質問紙調査により評価

【高等学校】

- ・論理的思考を伴う英語によるコミュニケーション能力（4技能）を筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により評価
- ・外部検定試験、質問紙調査の実施

第二年次

【小学校】

- ・プロソディ、発音と綴りの関係の習得、コミュニケーション能力をオーラルテスト及びリスニングテスト（外部検定試験等）により評価
- ・「言葉の学び」への意識を質問紙調査により評価

【中学校】

- ・プロソディ、発音と綴りの関係の習得をALTによる発音テストにより評価
- ・英語によるコミュニケーション能力（4技能）を筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により評価
- ・外部検定試験、質問紙調査の実施

【高等学校】

- ・論理的思考を伴う英語によるコミュニケーション能力（4技能）を筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により評価
- ・外部検定試験、質問紙調査の実施

第三年次

【小学校】

- ・プロソディ、発音と綴りの関係の習得、コミュニケーション能力をオーラルテスト、リスニングテスト（外部検定試験等）により評価
- ・「言葉の学び」への意識を質問紙調査により評価
- ・英語力の向上については、CAN-DO リスト形式での学習到達目標を踏まえ、活動の観察、パフォーマンステスト、ポートフォリオ評価等により4技能を評価

【中学校】

- ・プロソディ、発音と綴りの関係の習得を発音テスト、英語によるコミュニケーション能力（4技能）を筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により評価
- ・外部検定試験、質問紙調査の実施

【高等学校】

- ・論理的思考を伴う英語によるコミュニケーション能力（4技能）を筆記テスト（リスニングテスト及びリーディングテスト）、実技テスト（スピーキングテスト及びライティングテスト）により評価
- ・外部検定試験、質問紙調査の実施

○平成27年度の進捗状況・課題

<成果>

【小学校】

- ・プロソディ能力（シラブル感覚、アクセント感覚）を測るテストの結果、高学年のプロソディ能力が有意に向上したことが実証できた。
- ・第5・第6学年で、Hi, friends! の活動を中心にリスニング能力の評価を実施することができた。
- ・スピーキングにおいては、挨拶や好きなものをたずねたり答えたりするなど、ALT との簡単なやりとりを評価することができた。また Show And Tell、簡単なプレゼンテーションも実施することができた。
- ・小学校外国語活動・英語に関する実態調査（1～6年）を実施することができた。

	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生	
	良 い	ま あ 良 い										
1 外国語活動の授業は好きですか	73	18	68	26	66	28	46	35	75	18	63	32
2 外国語活動の授業に進んで参加できましたか 外国語活動の中でどのような活動が楽しかったか	71	21	69	24	58	34	41	45	59	33	44	46
4① 英語の歌やダンス 英語のゲームをすること	70	19	82	15	72	26	45	36	72	24	21	56
② 英語で友だちと会話すること	73	18	82	18	87	13	73	17	84	15	75	23
③ 英語が好きですか	67	17	68	25	63	32	55	29	54	38	41	34
5 英語が使えるようになりたいですか	61	26	64	26	67	24	44	28	59	31	67	23
6 英語が使えるようになりたいですか	80	16	82	15	82	13	68	18	83	10	91	6

【中学校】

- ・「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」については、全学年、年5回の定期考査で評価した。
- ・「話すこと」については、ALT によるインタビューテストと、ペアワークでスキットを作り、発表活動を実施した。
- ・中学校全学年を対象に外部試験（英検）を実施した。

【高等学校】

- 論理的思考を伴う英語によるコミュニケーション能力（4技能）の評価は、以下のように実施した。いずれも授業で行った以外の初見の文章や課題を与えている。
 - ・「聞くこと」及び「読むこと」については、全学年、年6回の定期考査（筆記テスト）で評価した。
 - ・「話すこと」については、第1・第2学年は、ALT によるインタビューテストや、生徒2名による会話テストを実施した。また、Show And Tell、スピーチやプレゼンテーションも実施した。第3学年は、プレゼンテーション、ディスカッション等によるスピーキングテストを実施した。
 - ・「書くこと」については、全学年、年6回の定期考査（筆記テスト）での評価に加えて、一定の話題と時間（15～20分）を与え、実技テストを実施した。
- 外部試験
 - ・第1・第2学年は、GTEC for STUDENTS (Basic)、第3学年は GTEC for STUDENTS (Advanced) をそれぞれ年1回受験させ、分析会を実施した。
- その他
 - ・第1学年は、3学期に4技能についての質問紙調査を実施する。

<課題>

【小学校】

（課題）

- ・ヘボン式ローマ字指導の効果検証

- ・パフォーマンステストの内容精選と評価
- ・外部試験の実施と検証

【中学校】

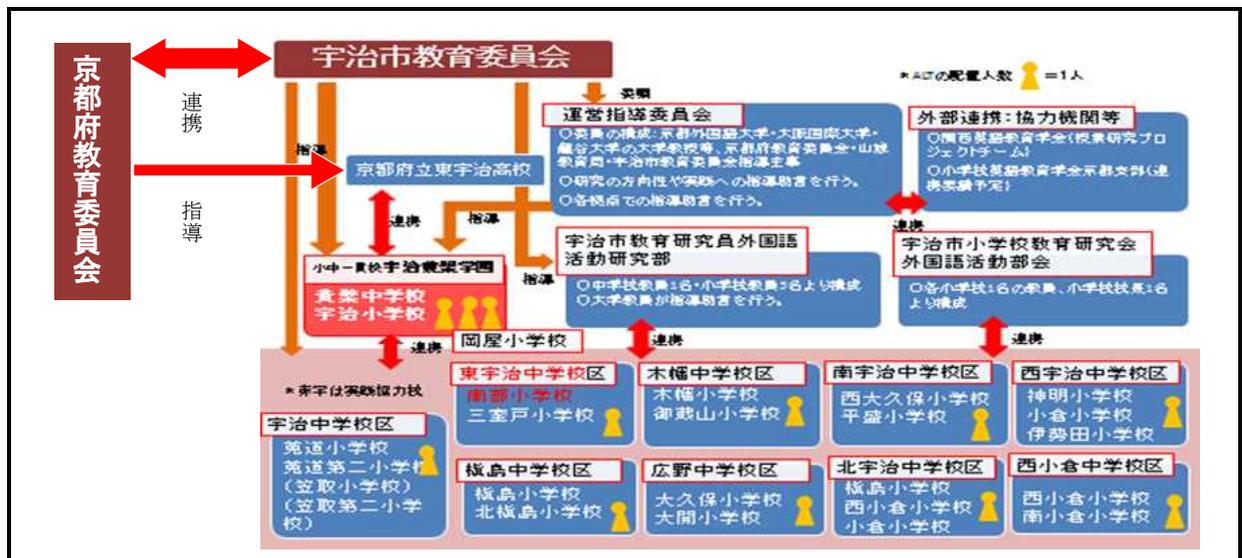
- ・発音記号指導の効果検証
- ・発達段階に応じた表現内容の深まりを意識したパフォーマンス評価の在り方についての研究
- ・パフォーマンステストの評価基準や評価の場面とその方法についての検証と改善

【高等学校】

- ・指導と評価の関係について一層研究を進め、特定課題のルーブリック（短期的ルーブリック）作成と改訂をさらに進める。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

専門的な見地から指導、助言、評価を行う。

- 5月 運営指導委員会①
- 11月 運営指導委員会②
- 2月 運営指導委員会③

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・運営指導委員会を年間3回開催し、本地域の取組や具体的な方向性について指導・助言をいただいた。
- ・運営指導委員の先生方を招いた研修会を年間6回実施することができた。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	英語教育推進委員会①	
5月	英語教育推進委員会② 小・中学校研修会「英語の発音のしくみ」 龍谷大学 准教授 大阪国際大学 准教授	運営指導委員会①
6月	英語教育推進委員会③ 高等学校公開授業研究会 6/4 中学校公開授業研究会 6/15 小学校研修会「ALTと楽しく授業をしてみよう」	
7月	英語教育推進委員会④ 小学校公開授業研究会 7/2	
8月	小・中学校研修会「教室の空気をかえる教育コミュニケーション」 京都外国語大学 教授 8/21 英語教育推進委員会⑤	
9月	英語教育推進委員会⑥ 中学校公開授業研究会 9/1 小・中学校公開授業研究会・研究協議 9/28 立命館大学 教授 小学校研修会「絵本の読み聞かせをしよう」 9/30	
10月	英語教育推進委員会⑦ 高等学校公開授業研究会・研究協議 10/1 立命館大学 教授 氏 高等学校公開授業研究会・研究協議 10/27	
11月	英語教育推進委員会⑧ 中・高等学校公開授業研究会・研究協議「英語で教える英文法」 立命館大学 教授 11/2 高等学校公開授業研究会・研究協議「授業は英語で行うことを基本とする」11/18 同志社女子大学 教授	運営指導委員会②
12月	小学校研修会「モジュール学習に挑戦してみよう」 京都教育大学附属京都小中学校 教諭	
1月	英語教育推進委員会⑨	
2月	英語教育推進委員会⑩ 小学校研修会「小学校英語で大切なこと」 大阪国際大学 准教授 先進校視察 広島県府中市立府中明郷学園 2/9 高等学校外部試験結果分析会〔GTEC〕 2/10	運営指導委員会③

	小・中学校公開授業 2/24 先進校視察 東京都 日野学園	
3月	英語教育推進委員会⑩	
<p>【その他の取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第15回小学校英語教育学会（JES）広島大会 自由研究発表 7/25 「英語学習につながるローマ字学習のための教材開発」 ・ 文部科学省視点研究開発学校3年次研究発表会参加 徳島県鳴門市立林崎小学校 11/27 		